

## 文体論

水藤 新子

日本文体論学会の創立50周年に合わせ  
るかのように、2010年から2011年にか  
けては大部の研究書が続けて世に出た。

安井寿枝『谷崎潤一郎の表現 作品に  
見る関西方言』(2010.8)は、「谷崎の作家  
としての表現意図」を、作品内で使用さ  
れた「関西方言」の面から解き明かすこ  
を目的とする。谷崎が東京出身者であ  
ることを根拠に、関西を舞台とした作品  
の表現が方言学的に正しいか否かばかり  
が取り沙汰されてきた憾みの残る従来  
の研究とは一線を画す論考である。I章  
で「作品における関西方言の変遷」を概  
観し、II章で「『卍』初出と初版における  
校異」を示した後、III章では「『細雪』蒔岡  
家・四姉妹の措辞」に焦点を当てた丹念  
な表現分析が展開される。自称詞・他称  
詞、呼びかけ、文末表現等の選択によっ  
て個々の人物造形に生彩を与えることこ  
そ谷崎の狙いであることが、丁寧に収集  
された用例と緻密な分析によって明らか  
にされる。文体研究の本来めざしたところ  
は、このような姿ではなかろうか。

中村明『文体論の展開—文藝への言語  
的アプローチ』(明治書院 2010.11)は、  
これまでの著作に収録されなかった近代  
文学作品を対象とした文体分析をまと  
めたものである。全十章のうち七章まで  
は、「明治期文豪 重厚な文体」「白樺派作  
家 勁直の文体」「川端康成 稲妻の文体」  
「小沼丹 ヒューマナーの文体」等、個別の作  
家・作品の魅力に語学的な個性の面から  
斬り込んでみせる。後半三章は「言語調

査に映る文体の姿」「文体印象に働く表  
現要素」「作品意図と文体効果」として近  
現代を代表する作家たちを俎上に載せ、  
句読点や漢字の使用率、接続方式、比喩  
表現、視点等の面から俯瞰する。広さ深  
さを兼ね備えた論考は、表現学を志す者  
にも多大な示唆を与えてくれる。

ここに洩れた「いくぶん軽いタッチの  
論考」は『日本語の美—書くヒント—』  
『日本語の芸—作家のいる風景—』(とも  
に明治書院 2011.7)に収録された。「**「○  
○学的」と規制されない、「ただの文体論」  
をやりた**」いと願ひ培った「職人の勘」、  
そして行き着いた“軽み”の境地に易々  
と手の届くはずもないが、著者が編集主  
幹を務めた『日本語 文章・文体・表現  
事典』(朝倉書店 2011.6)は、道半ばの徒  
には何よりの道標である。「具体的な言  
語事実にふれない文章批評は信用でき  
ず、作品の文体に届かない言語分析は文  
学研究として無意味である」との立場か  
ら、文章用語・文体用語・表現用語・レ  
トリック用語の解説、文章・文体・表現  
の基礎知識、ジャンル別文体の概観から  
目的・用途別の文章作法、近代作家の文  
体概説と表現鑑賞、名詩・名歌・名句の  
表現鑑賞、さらには70冊余の基本文献紹  
介まで盛り込んだ、本邦初の本格的な「日  
本語表現体系の総合的な事典」である。  
拠って立つ考えの差はあれ、「ともに日  
本語の姿を追う」225名に及ぶ執筆陣が  
各の知見を余すところなく差し出した本  
書は、研究領域の幅広さといいい収録内  
容の充実度といいい他に類を見ない。学  
会創設以来半世紀を通して俟たれてきた  
理想の一冊が、研究の活性化をもたらす  
ことを期待してやまない。(中央学院大学)